

鶏頭の龍と最後のラオス王



王宮庭園のシーサワンウォン王像
シーサワンウォンは1904年から59年まで半世紀にも渡って君臨したが、実際は政治的実権を持たぬ傀儡の王であった

長く王家の菩提寺だったワット・シェントーンの本堂東側お堂には、シーサワンウォン王の葬儀に際し、その亡骸を運んだ霊柩車が保管されている。舟のような形をした霊柩車は、長さ7〜8メートル、高さ4〜5メートルほどで、全面に金色の彫刻がほどこされた豪華なものだ。そして、王の棺を護るように、前に3頭、左右に4頭、全部で7頭の龍たちが霊柩車をぐるりと取り囲んでいる。龍たちは首をもたげ、牙を剥き、また頭部には縦に並ぶ複数の鋭い角を持つ。

階段の手すりに、屋根瓦に、壁画の中に——ルアンパバーンの街を歩くと実にさまざまな姿の龍を眼にする。ひとまず「龍」という漢字をあてたが、ここでいう龍とは、インドから伝来した天気を司るといわれる蛇神ナーガであり、手足が無いところなど、日本人が考える龍とは異なる部分が多く、龍の文字を使うのは適当でないかと思う。ちなみに、ナーガとはサンスクリット語でコブラのことである。インドでは多頭の蛇、あるいは、上半身が人間下半身が蛇といった半人半獣の造形に描かれることも多い。

日本や中国など、極東の国々の龍に関しては、インドのナーガを起源とするという説、元は別々であったのがその影響を受けたという説など、諸説あるようだが、筆者はどうしてもインド起源説の方に説得力を感じてしまう。インドから東に旅をしていくと、インドでは擬人化された造形のものを除き、基本的に蛇そのままの姿だったナーガが、東進するにつれ、角を生やし、手足を持ち、翼を広げ——と、さまざまな動物のパーツと合体して複雑化していく過程がよくわかるからだ。

ラオス国民の多数派であるラオ族は





つ」と信じられており、これはまったく奇異なことではない。例えば、中国では悪霊払いをする道士が鶏血を使い、古代には日本でも、目の病を患ったときに鶏にくちばしで目を突かせて治すという危険な民間療法があったとの記録がある。インドシナの民は、蛇の姿をしたナーガに聖なる力を持つ鶏を合体させれば、更にパワーアップすると考えたのだろう。

最後の王の謎

古来、水辺で暮らすことを好み、メコン河畔に集落を築いた。水辺に住み農耕を営む者が、天気を司り水の恵みをもたらすというナーガを祭ったのは自然なこと。その熱心なナーガ信仰によって、ラオ族は他民族から「ナーガの民」と呼ばれてきたのだという。

ラオスを始め、インドシナのナーガはたいてい頭に鶏冠とさかに似た角を持っている。これはインドのオリジナルのナーガにはまず見られないものだ。蛇神ナーガにわとりに鶏の鶏冠を加えるというのもなにやら不釣り合いな感じがするが、アジア各地では「鶏は聖なる力を持つ

現在は博物館として公開されている王宮の正面上部にも、王家の象徴である象とそれを守護するナーガがモチーフのレリーフが掛かっている。この宮殿が建てられたのはフランス植民地時代の1904年。ラオスがフランス植民地になった後もルアンパバーンは保護領扱いで王権も保護されており、宮殿はフランス政府によってシーサワンウォン国王に贈られたもの。

シーサワンウォンは1904年にルアンパバーン王に即位。45年にフランスを駆逐した日本の後押しによってラオス独立を宣言し、ラオス王国の初代国王となる。日本敗戦後は独立を撤回

するが、46年にフランスによって再びフランス連合ラオス国王の地位と自治権を与えられた。

イタリアから運ばれたという白い大理石の階段を上って玄関ホールに入る。ホールの右手は王の、左手奥は王妃の接見の間になっている。ホールを過ぎると赤地の壁一面に白銀や鏡を使って仏や象などの動物のモザイクがほどこされた広間に出る。ここは戴冠式を行うための場所で、部屋の中央に置かれた王座には象と、そしてここにも、それを守護する鶏頭のナーガ数十体が彫られている。シーサワンウォン王が59年に他界した後、新王の戴冠は行われず、シーサワンウォンは最後のラオス王となったのだった——「表向きには」の話である。

シーサワンウォンの死後もサワンワッタナー皇太子を始めとする王族によって宮殿は使われており、即位が行われなかったとは考えにくい。即位はなされたものの、内戦などの事情から国を挙げての戴冠式は行われなかったというのが実際のところのようだ。

サワンワッタナーは社会主義化後も大統領顧問という名誉職を与えられて宮殿に住まうことを許された。し

かし、77年に起こった内乱に王家が関わったとの疑いをかけられて宮殿から追われ、翌年、囚われのうちに他界する。死因は公にされていないが、極度の栄養失調であったと噂されている。現政府が強引に「シーサワンウォンが最後の王」とするのは、「政府が王を死に至らしめた」との譴責を避けるためだと思われる。国民が王に対して持つ強い畏敬の念を恐れていることだろう。戴冠の間の奥は王族の居所になっている。王の書斎の本棚にはラオス文字で書かれた書籍の他、仏語雑誌のパリマッチ、中文の中国皇帝正史全巻などが並ぶ。王は語学に堪能であつたらしい。アメリカ政府から贈られたというビクター社製蓄音機のターンテーブル上では、チェロの名手パブロ・カザルスの「インテルメッツォ」がほこりを被っていた。サワンワッタナーが最後に聴いたレコードなのだろうか。

王の寝室は宮殿の一番奥にある。白い壁と魚げ茶の床の簡素な内装。鉛色をした木製ベットの背もたれには、やはり、ナーガが彫られていた。宮殿はまるでナーガの巣のようだ。しかし、結局は鶏頭のナーガも王を護ることができなかつたのである。■



右頁上：ワット・タム・プーシーへ続く階段手すりにある石のナーガ。頭に頂くのはまさに鶏冠そのもの
上：フランス建築をベースにラオスの伝統様式を取り入れた王宮建築。すぐ裏手にはメコン川が流れる
下：釈迦生誕祭で使うナーガの祭器。尾から花を浮かべた水を入れ、口の下の穴から釈迦仏に注ぎかける

